

折々の銘 5

折々の銘 【扶桑】 ふさう

・日 暘谷に出で 咸池に浴し 扶桑を払ふ 是れを晨明といふ 『淮南子』天文訓

〔太陽は暘谷に現れ咸池で水浴して扶桑に到る これを晨明という〕

『淮南子』[エナンジ]は神話伝説に基づいた道家の影響の強い百科全書・哲学書。前漢の淮南王劉安の撰です。

上記は太陽の一日の進行を述べた部分で、咸池とは天の池といわれる星座のこと、晨明とはあけぼののことです。したがって、扶桑は東の方角にあり、太陽が昇る拠点となる神木ということになります。

『山海経』第九 海外東経によれば、暘谷の水の中に扶桑があり、十もの太陽が集まっていた。その内、九つの太陽が扶桑の木の下の方の枝で湯浴みをし、残りの一つの太陽が上部の枝にいて今まさに出ようとしているということです。

さらに『淮南子』本経訓によれば、かつてこれらの太陽は出番に混乱が生じ、一度に全て昇ったため大地の草木を焼いてしまいました。そこで弓の名手の羿(げい)が九つの太陽を射落とす、現在のように一つの太陽に落ち着いたということです。

古代中国の宇宙観を探るには欠かせない話で、この様は漢墓の副葬品などに図像を見ることができま

す。『梁書』東夷伝には扶桑は国名として紹介され、大陸の東方海上にあり、桑の木が多く、民は桑の葉を食べ、桑の木の皮で衣類や家の屋根を作り、独自の文字を持つと記されています。

この扶桑国は日本のことではないかとかつて平田篤胤などの国学者が主張していました。

しかしながら、東夷伝の記載は、決して実地調査に基づいて書いたものではありませんので、無理に日本に比定する必要はないように思います。

ただし、扶桑が日本を暗示する言葉、若しくは別称として用いられた例は中世以降各時代に見られます。

12世紀初頭、僧皇円が編纂した日本の歴史の書名は『扶桑略記』です。

その一世紀後、『喫茶養生記』でお馴染みの栄西が建久六年(1195)博多に聖福寺を建立しますが、この寺は後に鳥羽天皇より「扶桑最初禅窟」という扁を賜っています。

南北朝時代の『神皇正統記』には「(日本も)又扶桑と云名もあるか」と否定的ながら、日の出づる扶桑の謂われを述べています。

明治八年、明治新政府がイギリスサミュエルダ社に発注した戦艦を「扶桑」と名づけたのもこの例に入るでしょう。

我が国に現存する古い文化財に扶桑図はないものでしょうか。

それが、思わぬところに隠されて？いるのです。

法隆寺蔵玉虫の厨子には各面に漆絵が描かれています。飛鳥時代の玉虫の厨子の絵画は、中国六朝時代の様式を源流とするものです。

六朝時代の仏教美術は、外来の仏教思想を伝統的中国文化に置き換えて表現した様式です。私はこうした様式を格義仏教様式と読んでいます。

宮殿部背面の靈鷲山図は、山頂が三方に分かれ、麓より山頂が広く中国の代表的仙界である崑崙山の特徴を踏まえていることは以前述べたとおりです。(折々の銘 63崑崙 参照)

また、須弥座背面には世界の中心をなすというインドの伝説的山岳、須弥山が描かれています。

玉虫厨子には大海に浮かぶ島のように須弥山を描いていますが、これは中国の蓬萊山の図像を模しています。

宮殿部背面と須弥座背面は西方の崑崙と東方の蓬萊の対比が見られます。

さて、この須弥山図は、高く聳え立ち左右に枝の張った樹木のような山の姿をしています。これは東方の扶桑の姿を基に山岳を描いたものです。

高く増殖する樹木の姿を借りて、山岳の気韻を表そうとしたものと思われる。

古代中国では石も山も長い時間をかけて増殖すると信じられていたことが、このような表現を可能にしたのでしょう。

(増殖する石に関しては折々の銘 61君が代 参照)

玉虫の厨子の絵画は仏画でありながら、他にも随所に古代中国の伝統的図像が隠されているのです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~